

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成22年9月22日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 大学院 人間・環境学研究所

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 小 西 賢 吾

事業区分	平成22年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	第12回国際チベット学会会議	
発表題目	Socio-economic Background of the Continuance of a Bon monastery: A case study of Amdo Shar-khog	
開催場所	ブリティッシュ・コロンビア大学 (カナダ、バンクーバー市)	
渡航期間	平成22年8月15日 ~ 平成22年8月22日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空賃 (諸税込)
会議参加登録費		18,638 円
宿泊費		48,612 円

## 成果の概要（平成 22 年度国際研究集会派遣助成）

研究集会の名称	第 12 回国際チベット学会会議
開催場所	ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ、バンクーバー市）
渡航期間	平成 22 年 8 月 15 日 - 平成 22 年 8 月 22 日
発表者名・所属	小西 賢吾（人間・環境学研究科 博士後期課程 3 年）

### < 研究集会の概要 >

国際チベット学会会議（Seminar of the International Association for Tibetan Studies）は、1977 年以來 3-4 年に一度開催されてきた、チベットの文化・歴史・言語等を対象とする諸分野の研究者が集まる世界最高水準の唯一の国際研究集会である。この研究集会は、文化人類学、宗教学、歴史学、言語学などを専門とする第一線の研究者が最新の研究成果を発表し、学際的な議論を通じてチベット研究の最先端を形成することを目的としている。これまでの集会の成果をもとにした論文集が数多く公刊されており、研究発表の水準の高さを裏付けている。

今回参加した第 12 回の会議は、ブリティッシュ・コロンビア大学の Institute of Asian Studies を中心とするスタッフにより運営され、8 月 16 日から 21 日にわたり開催された。参加者は欧米とアジアを中心に 30 カ国以上、発表者だけでも 400 名近くに達する大規模なものとなった。6 日間にわたり行われた研究発表は、毎日午前に行われる総合討論と、チベット研究のあらゆる領域をカバーする 55 のセッションからなる。前者では、今後のチベット研究の方向性に関する議論や、研究資料の電子アーカイブ化に関する報告など、参加者全員の関心に応える刺激的な発表がなされた。後者では、各領域を代表する第一線の研究者による論文発表が行われた。いずれも発表と質疑は英語とチベット語によってなされ、発表会場内だけにとどまらず活発な議論が行われた。また夜には民族誌映画の上映が行われるなど、非常に充実したプログラムであった。

### < 発表内容の概要 >

発表者は "Bon Communities, Institutions and Lineages" と題するセッションにおいて発表を行った。このセッションは、チベットへの仏教伝来以前からの歴史を持つとされる伝統宗教ボン教を対象とするもので、同じ関心を持つ研究者が一堂に会する貴重な機会となった。また研究者のみならず、中国・ネパール・インドなどのボン教の僧侶、また北米在住のチベット人も多く参加し、実践者の視点からのコメントも得ることができた。

発表者の発表は、中国四川省北部、シャルコク地方のチベット社会を対象に、伝統宗

教ボン教の寺院が現代において存続するための社会経済的基盤を明らかにするものである。特に、近年行われた僧侶と世俗の人々の共同作業による仏塔の建設を事例としてとりあげ、世俗社会の変容と宗教の存続がいかなる関係にあるのかを明らかにした。

文化大革命後の1980年代に復興した寺院は、21世紀初頭において様々な背景の下で活動の存続を模索している。まず彼らの活動の経済的基盤として、経済成長と観光化の影響を指摘する。これらは1990年代後半において寺院や世俗社会に大きな現金収入をもたらし、寺院の経営に大きな変化を与えてきた。一方で2000年代後半以降、過剰な観光化への危惧から、寺院は外部への開放を制限し、よりローカルな宗教実践の場の整備を重視しつつある。そしてこうした場を支える社会的基盤は、人々の宗教への様々なニーズと、有力な高僧たちによる宗教活動の活性化への働きかけが交差する中で形成されている。仏塔建設は、そうした状況を最もシンボリックに表す事例の一つであり、仏塔が経典に説かれる意義にとどまらず、現地の社会経済的文脈に埋め込まれた形でその役割を果たしていることが特筆される。そして、建設にかかる大規模な協働そのものが、世俗の人々をより強く宗教に感情移入させ、宗教実践の場の存続に寄与している点を論じた。

発表に対して、特に文献学的視点から、経典に説かれる仏塔の意義や建造方法と、現実の建造過程のズレについて専門的なコメント、また僧侶達からも実践者としてのコメントを多く得ることができた。これらは、発表者が普段所属する文化人類学の領域では得がたいものであり、学際的に組織された本研究集会ならではの収穫であった。また、セッションへの参加を通して、当該分野の世界的な研究者と交流し、資料に関する情報交換や刺激的な議論を行うことができた。これは発表者のこれまでの研究の不足点を補い、成果をより洗練することが可能となる非常に有意義な経験となった。なおこの発表論文は、現在学会論文集の一部として出版の準備が進められている。

#### < 謝辞 >

京都大学教育研究振興財団からの助成を頂き、研究集会での発表が可能となりました。研究発表はもちろんのこと、様々な研究者との交流も含め、自分の研究の進展にとってかけがえのない貴重な経験をすることができました。あつく御礼を申し上げます。